



厳復と翻訳 : 主体性と「達詣」の限界性について

劉, 争

(Citation)

愛知 : $\phi \iota \lambda \sigma \phi \iota \alpha$, 29:31-42

(Issue Date)

2017-12-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010342>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010342>



嚴復と翻訳

—主体性と「達詣」の限界性について—

劉 争

1. はじめに

嚴復(1854-1921)は、その独特の翻訳スタイルで知られている中国の翻訳家である。嚴復の翻訳は、二十世紀への移行期における中国の文化的、歴史的状況にたいする一人の知識人の意識的反応として捉えられ、評価され、研究されてきた。また中国と西洋という異質の文明の出会いによる中国の対応、変化を知るための一次資料として分析されてきた。嚴復の翻訳に関する従来の研究は大体二通りの見方がある⁽¹⁾。

一、嚴復が、西洋の原著者の思想内容をいかに歪曲、誤解して理解したか、みずからの有する中国の伝統思想をもとにいかにユニークに解釈したか批判的に論じる見方。

二、中国の伝統文化のもとに生きた嚴復が西洋の思想家の文章からいかなる可能性を読みとったか、西洋思想から中国にとってのいかなる有効性を引き出しえたか、という視角から、嚴復の翻訳という思想活動を評価する見方。

嚴復は自分の中で近代との格闘、伝統との格闘を同時進行させながらも、翻訳スタイルにおいてはきわめて主体的であったと思われる。本稿は嚴復が翻訳者として翻訳過程における彼自身の問題意識、目指す効果(目標)、意図的に講じた手法を主体性とし、彼が自らの翻訳及びその翻訳論「信・達・雅」を通して実現したい目標が露呈する主体性の限界を「達詣」に絞って分析を試みる。

2. 嚴復の翻訳

嚴復中国福建省の代々医者の家業とする一族に生まれ、幼少より科挙合格のための教育を受けたが、父の病死の後に家が没落したため、科挙受験を断念し当時推進されていた洋務運動の成果の一つであった福州船政学堂に学んだ。福州船政学堂は海軍の人材育成のために設けられたもので、伝統的な教育を離れ、この西洋教育(英語・数学・物理学等)を受けたことが嚴復の将

来を決定付けることになる。

彼は最初の清国留学生の一人として 1877 年渡英し、1879 年までポーツマス海軍大学で軍事学を学んだ。イギリス留学中の厳復は単に軍事関係の知識を吸収しただけではなく、広く西欧の文化・思想を吸収し、深く感銘を受けたものと考えられる。

1880 年に帰国した厳復は李鴻章が天津に創設した北洋水師学堂に招かれて傀儡（操り人形）の総教習となり、以後二十年間その職にあった。1894 年から翌年にかけて戦われた日清戦争での敗北は、洋務運動の限界を露呈するものであった。この時に際し、厳復は『直報』紙上に「論世変之亟」、「原強」などを発表し、啓蒙活動を本格的に開始する。

厳復が翻訳した西洋の著書のセレクション⁽²⁾のうち、『天演論』(Evolution & ethics and other essays, Thomas Henry Huxley) は中国における最初の社会進化論紹介であり、まさしく清末において一世を風靡した。辛亥革命の後、孔子崇拜を提唱や袁世凱の帝政運動への参加によって保守派のラベルを貼られ、失意のうちに晩年を迎えた。

厳復の翻訳についての評価は従来賛否両論に分かれている。その主な理由は、厳復の翻訳が原書の逐語的な翻訳ではない、というところにある。厳復は、原書の骨格を分解し、執拗というほど原文をパラフレーズしたうえで、詳細なコメントを付け加えた。厳復自身はこのような訳し方を「達詣」というふうになづけ、翻訳のあるべき姿として提唱している⁽³⁾。例えば統計によると、『天演論』⁽⁴⁾に付け加えた厳復の意識（創作的翻訳）は全文の 41.92% を占め、原文にない補充、加筆、コメントは 202 箇所到達している⁽⁵⁾。

3. 厳復の翻訳姿勢—「達」を中心に

3-1. 「信、達、雅」と「達詣」

厳復は『天演論・訳例言』において次のように述べている。

譯事三難：信、達、雅。求其信已大難矣，顧信矣不達，雖譯猶不譯也……今是書所言，本五十年來西人新得之學，又為作者晚出之書。譯文取明深義，故詞句之間，時有所僨到附益，不斤斤於字比句次，而意義則不倍本文。題曰達詣，不云筆譯，

取便發揮，實非正法。什法師則有云：「學我者病。」來者方多，幸勿以是書為口實也。

（訳事に三つの難がある。信と達と雅である。信を求めることがすでに大難である。しかし信であっても達でなければ、訳しても訳とはいえない。……いまこの書の述べるところは、五十年来新得の学に基づき、しかも作者晩出の書である。訳文は深義を明らかにするに努めた。そのため、詞句の間、時に顛倒附加したところあり、字句の配列にはこだわらなかった。しかし、意義においては原文に背いていない。題して達旨といい、筆訳といわないのは、意の発明に便なるためであり、実は決して正しい方法ではない。……什法師（鳩摩羅什）の言に、我に学ぶ（模倣する）ものは病あらん、とある。来者はまさに多いであろうが、幸にこの書を以って口実とすることなからんことを⁽⁶⁾。）

信とは直訳、達とは意識、雅とは修辞であるが、嚴復は「正法」ではないと知りつつ、「信」より意識を多用する「達」を優位においた理由はまさしく真理を中国に伝えなければならない義務感と、それを達成できるのは己しかないという自負によるものだといえよう。引き合いに出された「鳩摩羅什」の中国翻訳史における地位を確認すると、嚴復の自負がさらに浮き彫りになる。

鳩摩羅什は仏教を中国に紹介した翻訳の巨匠であり、東アジアの文化交流史においては地殻変動を起こした人物として知られている。その功績について、高名な史学者であり、国文学者でもある陳寅恪は「数千年の間、鳩摩羅什が残した翻訳の功績と比肩できるのは、玄奘法師だけである」と評価し、さらに、「原文の煩雑なところを削除したり、原文のスタイルにこだわらなかつたり、原文を変更したりすること」⁽⁷⁾も辞さない大胆さを鳩摩羅什訳の醍醐味としている。自らを鳩摩羅什と比しながらも、後者の模倣や追随を許さない「我に学ぶ（模倣する）ものは病あらん」という表現には、嚴復の途轍もない自負と野心が垣間見える。

3-2. 自ら主張する「達」と対角的存在—嚴復がみる「東文」

西学摂取において自らの見識や訳の「達」に自信を持っていた嚴復は、当

時すでに数量ともに中国を凌駕していた日本の翻訳、即ち「東文」に対しては批判的な態度をとっていた⁽⁸⁾。その態度は Society の訳に「社会」を使わずに「群学」を用いたことにも見られる。また、嚴復は「経済」という日本の訳語に反対し、その代わりに「計学」を用いた。嚴復は「経済」という語について、西洋の「economy」の原意に比べて広すぎるため、訳語には不適切だと考えていた⁽⁹⁾。このほか、「capital」の日本語訳は「資本」、嚴訳は「母財」。「evolution」の日本語訳は「進化」、嚴訳は「天演」。「philosophy」の日本語訳は「哲学」、嚴訳は「理学」。「metaphysics」の日本語訳は「形而上学」、嚴訳は「玄学」、などの例がある。(表1参照⁽¹⁰⁾)

表1 『日本漢語と中国』にみる訳語対照一覧

原語	嚴復訳	日本の訳語	日本訳の出処
evolution	天演 進化	化醇，進化，開進	哲学字彙 I, II
		進化，發達	哲学字彙 III
Theory of evolution		化醇論，進化論	哲学字彙 I, II
evolutionism		進化主義，進化論	哲学字彙 III
evolution theory	天演論	進化論	動物進化論
Struggle for existence	物競	競争	哲学字彙 I
		生存競争	哲学字彙 II
selection		淘汰	哲学字彙 I
natural selection	天択	自然淘汰	哲学字彙 I
artificial election	人択	人為淘汰	哲学字彙 I
survival of the fittest		適種生存 (生)	哲学字彙 I
		適種生存 (生), 優勝劣敗	哲学字彙 II
		適者生存 (生), 優勝劣敗	哲学字彙 III

3-3. 「達」の文体的保障—桐城派の古文辞

嚴復が訳文の「達」を保障する媒体として選択したのは、桐城派の古文である。桐城派は中国、清代におこった古文の流派で、提唱者がみな安徽省桐城県の人であるための名称である。その理論は唐宋八家の古文に連なるが、新たに儒教理念を内容とする「義」と、俗語や麗辞を排して質実な文を書くべきだとする「法」とを重視した義法説を唱えた。当時の漢学家の訓詁と駢文家の修辞に反対して、厳格なまでに文章の典雅さを追求した。清末においてもなお勢力を誇っていた⁽¹¹⁾。嚴復は、精妙な理や微言には、漢以前の字法句法を用いることで伝達が容易になり、近世の俗文字ではそれが困難とする⁽¹²⁾。

嚴復が訳書によって伝えようとした対象は一般大衆ではなく、「中国の古書を多読する」教養ある知識人であった。かれらにのみ理解しうる深遠なる学理を伝えるためには、それにふさわしい文体を選ばねばならない。それが、古来中国に綿綿として伝えられた古文辞である。言い換えれば、嚴復が目指している「達」は一般民衆向けの「下の達」ではなく、士大夫階層向けの「伝達」であり、しいて言えば、皇帝などを代表とする統治者階層向けの「上の達」であろう。

4. 嚴復の翻訳に対する評価

4-1. 同時代の人々からの評価

『文学革命』期の指導者として、輝く足跡を文学史に残した人々についていえば、大抵その少青年時代に受けた嚴復の訳業の影響を無視することができない⁽¹³⁾という指摘があるように、確かに魯迅（1881-1936）、胡適（1891-1962）をはじめとする文学者や学者はその青少年時代において、嚴復の訳に心酔した人が多い。少年魯迅は「天演論」の訳を愛するあまり、暗誦までできた、と伝えられている⁽¹⁴⁾。14歳の時に、「天演論」に接し、その訳を「とても気に入った」という胡適少年が自らの名を適者生存の適に改め、字を適之にした逸話も嚴復の訳がいかにか「教養のある学童の心」を揺り動かしたのかを示している。

「天演論」は出版後わずか数年で全国を風靡し、凶らずも中学生の読み物

にまでなった。しかし、この本を読んだ人の中で、ハックスレーの科学史上また思想上の貢献を理解できた人は極めて稀であった。後年、胡適が「かれ（嚴復）の訳本は古文学史上においても高い位置を占むべきもの」⁽¹⁵⁾としながらも、「優勝劣敗」、「天演」「物競」などのキーワードが若者に消費されるためのスローガンに過ぎなかったと指摘し、嚴復の文章が「古雅」にすぎて、若者が嚴復から受けた影響は、簡易な文体で当時の読書界にもはやされた梁啓超（1873-1929）から受けたものより小さいと述べた⁽¹⁶⁾。

4-2. 外国からの評価

西洋における嚴復研究の第一人者で知られているハーバード大学教授のシュウォルツ氏は「嚴復が西洋起源の概念を中国に導入する際に、自らが持つ中国の伝統思想をもとに解釈している」と指摘し、「嚴復のように伝統文化をその内側から観察する人の眼を通して眺められるとき、それは相争い正反対である多くの傾向からなる複合体であり、他方彼は一つの実態的な全体としての西洋に反応するのではなく、十八世紀、十九世紀の思想の複合体に含まれるある一定の要素に対して反応するのである」と述べ、東西思想の融合において嚴復が残した大きな足跡を評価した。

嚴復が主張する「達」に関しては、シュウォルツは「嚴復はまことに微妙な操作を施している」と指摘した上で、この操作は、新しい言葉や概念を受容し出身社会に紹介した文化運搬者が、その社会の必要性に鑑み、既存の文化と適合させながらその語を解釈したために生じたものだ、と好意的に説明しながらも、「しかし、皮肉なことに、彼が造った新語の大部分は、日本製の新語との生存闘争に敗れ、消え去ることになったのである」と嚴復訳の生命力の無さを嘆いた⁽¹⁷⁾。

4-3. 現代の評価

現代中国における嚴復及びその翻訳についての研究は、中国における他の研究テーマと同様、その政治的時代背景に大きく左右されている。毛沢東は1949年の「論人民民主専制」において、「中国共産党が誕生する前までの中国で西洋に真理を求める代表人物」の一人として嚴復のことを高く評価して

いる。しかし、厳復にはその晩年に袁世凱帝政運動に利用されるという「反動的な一面」もあるため、多くの中国研究者は厳復を論じる際に「初期の急進性から晩年の反動化」へという叙述プロットを取らざるを得なかった。

上述の理由で長い間、厳復に対する中国（共産党）の評価はきわめて曖昧なものであったが、「四つの現代化」政策とともに名誉が回復され、2001年習近平氏編集の『科学と愛国—厳復思想の新たな探求』の発刊によって厳復についての研究が空前のブームを迎えた。

厳復の「西学に対する対等的会話」を期待する内的価値観に求める分析は、厳復の「主体性」を研究する際に、新たな方向を提示したといえよう。

5. 厳復の「達詣」と主体性の限界

現代の翻訳理論ではハリデー⁽¹⁸⁾が翻訳の機能を三つに分類する。観念形成の (Ideational) (経験の叙述)、対人的 (Interpersonal) (話者の態度表現)、テキスト的 (Textual) (言語の内部構成や、テキスト内あるいはテキストと場面の脈絡との間に結びつきが確立される言語手段) の三つである。この分類では「経験」を叙述する機能、対人的態度を表現する機能、言語構成と場面を結ぶ機能とし、翻訳が一種のコミュニケーション態度として内部にある経験と外部のテキスト場面とドッキングさせる役割であると理解できる。三つの機能のうち、経験の叙述は根本的な目的で、場面はニーズあるいは環境であり、態度はその手段であると言える。翻訳の根本的な目的は、人々の経験を交換可能にすることであり、意味の理解を可能にすることこそがその本質であると理解すべきである

翻訳者、あるいは西洋思想の媒介者としての厳復は中国の近代的覚醒に大きな影響を及ぼした。いうまでもなく、その影響力は「天演論」以来の翻訳の業績に負うものであった。もとより、彼が翻訳を通して伝えた「経験の叙述」は西洋思想のみならず、彼自身の儒学経験と融合したものであった。その「主体的叙述」こそ彼の言う「達詣」の中身であろう。厳復が翻訳に選べる主体的手法は「達詣」と桐城派的古文辞の組み合わせのみであった。

厳復は自らの訳を鳩摩羅什に重ね、その手法の正当性を強調していた。しかし、改めて両者の訳を比較すると、翻訳の生命力が受け手、即ち TT (目標

テキスト Target Text) の受容によって決められることが、明らかになる。鳩摩羅什が使用する文体は当時(唐)の話し言葉に近く、その訳文が「方言(口語)に曲従するが、本意から乖離しない」ことを特徴とし、「それまでの翻訳よりはるかに簡潔でわかりやすい」⁽¹⁹⁾ため、急速に普及し、千年経ても信者に誦読され続けている。それに対して「嚴復苦心の訳語は、しばらくは一部の識者たちに愛用されたが、現在の中国においてはほとんど『死語』と化し、いまの中国の進化論用語は、もっぱら日本語の方が一般に通用している」⁽²⁰⁾。

嚴復が翻訳した『群学律言』(The study of sociology, Herbert Spencer)の原著者スペンサーの本が日本では中国以上の大きな反響を起こしたものであった。嚴復と同じ年の松島剛が嚴復より早く明治14年に Social Statics を『社会平権論』と名づけて日本で翻訳出版した。部数についても、「いくら刷っても足らず、市内の本屋連中は、わざわざ詰めきりで製本の出来上がりを待つという勢いで、大変な売れ行きであった。土佐の立志社などというところからは電報で何十何百とまとめて注文して寄越した。……総体としての部数は何十万冊に上るかわからぬ」⁽²¹⁾という状態であった。これに対して嚴復の翻訳は初版6000冊程で、10回以上再版されたが、合計6万部程しか出なかったと推測されている⁽²²⁾。明治の翻訳の多くは漢文訓読語を多用しているが、今になっても一般読者が読めるほどわかりやすいものである。これは嚴復の翻訳と比較して明らかに違う点だといえる。

ナイダ⁽²³⁾は最良の翻訳の基準として、①コミュニケーション過程の効率のよさ、②意図の理解、③反応の等価、の3点を挙げている。つまり読者が、翻訳を通して ST(起点テキスト Source Text)のメッセージを正確に理解し、その訳文がわかりやすいと感じ、またそれに共感を持てるかの、3点である。嚴復は士大夫階層への伝達の効率のよさ、また彼らの理解や反応に最大限に配慮し、限定された読者層のための最良の翻訳を目指して努力したといえよう。

新解釈派のシュトルツエ⁽²⁴⁾によれば、「よい」翻訳とは翻訳者が ST と完全に一体化できて始めて実現するという。嚴復が ST のスペンサーらとの一体化を図ることなく、きわめて限定された TT の読者への一体化のみを努めていた。

このような「限定」した視野は嚴復の主体性の限界性によるものであり、彼の「達詣」の限界性によるものであっただろう。

6. まとめ

前述の通り、嚴復が主体性を持った翻訳をしたことは認めるべきであろう。またその独自の理解で「達詣」という目標を目指していた。嚴復の価値観が「立德」「立功」「立言」の序列⁽²⁵⁾によって構成されている「儒家的な功名主義」の大枠から離れることはなかった。嚴復の目指していた真の目標は恐らく「不朽」になるための「立言」にあると推察するが、翻訳の随所に見られる主体的選択が示した矛盾性、及び「達詣」の限界性もそこまで遡ってはじめて思想受容プロセスに発生する心理構造的な理由を突き止めることが出来る。

嚴復の翻訳は功利的要素の有無にかかわらず、そこから中国から近代西洋を見る嚴復の態度の一貫性が読み取れる。竹内好が指摘したように、「ヨーロッパがどう受け取ったにせよ、東洋における抵抗は継続していた。抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗を経ない近代化の道は無かった」⁽²⁶⁾。西洋で近代化の知を会得した嚴復が、あくまで東洋の知によって西洋の知を伝達することに終始執着したことは、視角をかえると、竹内好が言う「東洋からの抵抗」の一つとして捉えられる。

シュウォルツは、中国から近代西洋を見た嚴復を近代西洋から見ることによって、近代西洋を逆照射するという効果を生み出している。その意味からいうと、嚴復及びその翻訳を一つの出発点として、東洋の近代化において東洋と西洋の接合点として機能していた「日本」の知識人がどのように西洋主導の近代化を見てきたのか、また日本で形成された「近代化の知」を中国の知識人がどのように見ているのかなどを改めて問題として提起する必要があると思う。言語間、思想間の交渉によって維持されてきたそれらのプロセスを考察することによって近代化における東洋の本来の姿を逆照射することが出来るだけでなく、嚴復が夢見た「西洋と東洋の間の対等的な対話」の実現につながる要素の析出もできるからである。

註

- (1) 河田 悌一「近刊紹介—B・I・シュウォルツ著・平野 健一郎訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋—』、『アジアクォーターリー』第10巻第4号 1978年12月, 28-130頁
- (2) 厳 復の主な訳書一覧：
 - 《天演論》赫 胥黎 1896年(Evolution & ethics and other essays, Thomas Henry Huxley)
 - 《原富》(即《国富論》) 亚当·斯密 1901年(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, Adam Smith)
 - 《群学肄言》斯宾塞 1903年(The study of sociology, Herbert Spencer)
 - 《群己权界论》约翰·穆勒 1903年(On Liberty, John Mill)
 - 《穆勒名学》约翰·穆勒 1903年 (A System of Logic, John Mill)
 - 《社会通论》甄克斯 1903年(A Short History of Politics, Edward Jenks)
 - 《法意》(即《论法的精神》) 孟德斯鸠 1904年(Spirit of Laws, Montesquieu)
 - 《名学浅说》耶方斯 1909年(Primer of Logic, William Stanley Jevons)
- (3) 三浦具嗣「厳復の翻訳：西洋思想の中国化と普遍主義」、『紀尾井史学』2002年3月, 44頁
- (4) 厳 復(1898年) Thomas Henry Huxley (1825-1895) のEvolution and Ethics (1893年) の訳書
- (5) 黄 忠廉「変訳之『加写』功能研究」、『外語与翻訳』2015年第3号, 1頁
- (6) 高田 淳「厳復の「天演論」の思想—普遍主義への試み—」、『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』第二十巻 東京女子大学付属比較文化研究所 1965年
- (7) 胡 適『白話文学史・上巻』遠流図書公司(台湾) 1986年, 172頁
- (8) 鈴木 修次『日本漢語と中国』中央公論社 1981年。「いま泰西二千年の孳乳演進せる学術を求むるに、三十年勤苦して僅に得し日本に於て、盛に訳書ありと雖も、その名義の決す可きこと、其れ未だ安からず、その考測のトす可きこと、其れ未だ密ならず。乃ち徒に我に近きの故を以て、沛然として天下の学者を率いて之に趨く。世に志なくして学を好まざることかくの如き者あらんや。」

日本語訳：「今、西洋 2000～3000 年にわたってはぐくまれてきた学術を、三十年努力しただけで得た日本に求めているが、いくら訳書が盛んであろうと、その名義はいまだ安定しておらず、その考訂もいまだ満足ではない。いたずらに我国に近いがゆえに、一斉に天下の学者達が群がっていくが、世の中にこのように学ぶのをよしとせず、好まない者がいるだろうか。」

- (9) 『原富（国富論）』巻頭「訳事例言」：「計学、西洋名は葉科諾密（エコノミー）で、もとはギリシア語である。葉科（エコ）は「家」である。諾密（ノミー）は聶摩（ノモス）の転で「治」をいう。「計」とは、その意味ははじめ「家を治める」ことであった。それから料量・經紀（経営）・節制・出納についての広い意味となったが、国や天下の生・食のために「経」の字を用いることとなった。その意味が大衆に至って、日本ではこれを経済と訳し、中国ではこれを理財と訳した。整合性を求めるなら、経済はあまりに範囲が広すぎ、理財では満足できない。わたしはそれで計学を当てることにしたのである」。
- (10) 鈴木 修次『日本漢語と中国』中央公論社1981年
- (11) 青木 正児著『清代文学評論史』岩波書店1950年
- (12) 嚴 復「与梁啓超書」王栻編『嚴復集』中華書局 1986 年, 516 頁。日本語訳は三浦氏の訳を一部参照。
- 「文辞とは理想を載せる羽翼であり、情感を達する音声である。従って理の精なるものは粗獷の詞に載せることはできず、情の正なるものは鄙倍の氣に達せしめることはできぬ。中国の文の美たるものは、司馬遷・韓愈に勝るものなし。……私は文において決して淵雅に努めず、その是にのみ従っている。欧洲挽近の文章を中国の古文に訳しうるか否かを問うものがあるが、かれの進むところは理想、学術にこそ在る。……わたしの従事する所のものは学理蹊躑の書であり、それは学童に与えんとするものでなく、まさに中国の古書を多読する人物に期せんとするものである。」
- (13) 増田 涉「嚴復について」『人文研究』1957年第7号
- (14) 熊 月之『西学東漸与晚清社会』中国人民大学出版社 2011年, 560頁
- (15) 胡 適「五十年来中国之文学」『胡適文集3』花城出版社 2013年
- (16) 胡 適著・吉川 幸次郎訳『胡適自伝』養徳社1946年, 87-88 頁

- (17) B・I・シュウォルツ著、平野 健一郎訳『中国の近代化と知識人—嚴復と西洋—』東京大学出版会 1978年、93頁
- (18) Halliday Michael A. K. (1973) Explorations in the Functions of Language, London: Edward Arnold.
- (19) 陳 寅恪『金明館叢稿二編』三聯書店 2011年、236頁
- (20) 鈴木 修次『日本漢語と中国』中央公論社 1981年、200頁
- (21) 柳田 泉『『社会平権論』訳者松島剛伝』『明治初期翻訳文学の研究』
- (22) 廉 泉「與嚴復書四」孫 應祥、皮後鋒編『嚴復集補編』福建人民出版社 2004年、376頁
 嚴 復「與熊季廉書二十五」『嚴復集補編』251頁
 賀 麟「嚴復的翻譯」商務印書館編輯部編『論嚴復與嚴譯名著』商務印書館 1982年、29頁
- (23) Nida Eugene A. (1964) Toward a Science of Translating, Leiden: E. J. Brill. [成瀬武史(訳) (1973) 『翻訳学序説』東京：研究社]
- (24) Stolze Radegundis (1992) Hermeneutisches Übersetzen, Tübingen: Gunter Narr.
- (25) 『春秋左氏伝』襄公二十四年「大上は徳を立つること有り、其の次は功を立つること有り、其の次は言を立つること有り。久しと雖も廢せず。此を之れ不朽と謂う。」
- (26) 竹内 好『近代の超克』筑摩書房 1983年

所属 (神戸大学人文学研究科博士後期課程/神戸山手大学講師)